

# Active Learning Report

---

2020 年度  
アクティブ・ラーニング報告書



茨城キリスト教大学  
文学部文化交流学科

## 巻頭のことば

文化交流学科では2021年4月から新しいカリキュラムが始まります。そこでは新機軸として、従来の学科教育の旗印、その4本のうちの一つが「多文化協働」になりました。このことから分かりますように、よりアクティブな交流を学科の教育目標として掲げています。

2020年度はコロナ禍の中、文化交流学科にとっては実に厳しい一年でした。しかし、そうした中でも様々なアクティブ・ラーニングが行われ、21年の新しいカリキュラムに繋がる動きを学科の内外に示したと思います。この試行錯誤の経験は、学科の教育や研究にプラスに働くことはもちろん、コロナ後の社会で生き抜くことになる、学生一人一人の力になると信じています。



文化交流学科主任

染谷 智幸

2021年1月

## 目次

巻頭のことば（文化交流学科主任 染谷 智幸）

I	外国人児童に対する日本語教育支援	・ ・ ・ ・ ・ 1
	「多文化協働型日本語支援」の確立にむけて（宮崎 晶子）	
	フォトギャラリー	
	参加学生オンライントーク	
II	編集技法—情報発信の技術を実践的に学ぶ	・ ・ ・ ・ ・ 17
	情報発信とアクティブ・ラーニング（鈴木 晋介）	
	学生作品集	
	<シンポジウム>	・ ・ ・ ・ ・ 23
	ユネスコ無形文化遺産「山・鉾・屋台行事」の保存・継承と学校教育	
	シンポジウム開催報告（清水 博之）	
	<講演会>	・ ・ ・ ・ ・ 27
	香港の若者はなぜ政治化したのか	
	2020 年度文化交流学科講演会報告（志賀 市子）	
	< Faculty Development >	・ ・ ・ ・ ・ 31
	FD 研修会 韓瑞大学とのオンラインセッション	
	文化交流学科 FD 報告（染谷 智幸）	

## I 外国人児童に対する日本語教育支援

## 「多文化協働型日本語支援」の確立に向けて

宮崎 晶子

### はじめに

文化交流学科のカリキュラムには、2021年度より新たに「多文化協働」という学びの柱が加わる。本稿では、「多文化協働」内のアクティブ・ラーニング形式の授業「外国人教育支援演習」の実施概要と今後の課題について述べる。

近年、県北地域でも外国人労働者数が増加しており<sup>1)</sup>、同時に外国人児童数も増加している。本学の学生は日立市を中心とした県北地域出身者が多く、卒業後も県北を中心に居住する。将来、卒業生が支えるであろう社会を「平行社会」にしないためにも外国人と「協働する」スキルを身につける場が必要だと考えた。学科内ワーキンググループの話し合いを経て、交換留学生と日本人学生がペアになり外国人児童に日本語を教える「多文化協働型日本語支援」（授業名：「外国人教育支援演習」）の設置が妥当という考えに至った。

とはいえ、本学は小学校内での日本語支援の実績がない。いつ頃どこに入学するのか予想がつかない外国人児童に対する支援を、事前に履修登録が必要な大学の授業の中で実施することは現実的にはかなり難しい。加えて、外国籍の児童に対する支援は義務教育の中で積極的に実施されてきたとは言い難く、具体的にどのように対応するかは現場の教員の采配に委ねられてきたように見受けられる。現在のところ日立市には、「教育ボランティア」や「通訳ボランティア」は既存の枠組みとしてあるが、「日本語支援」はない。本学の日本語支援は、受け入れ先の小学校にとっても効果が予想できない「未知数」の支援だといえる。この授業を通して義務教育の入り口である小学校と高等教育の出口である大学がつながり、多文化共生社会を支える人材育成の仕組みを俯瞰的に描けたら、と考えている。

### 「外国人教育支援演習」

\*2020年度カリキュラムまでの授業名は「特別演習」

本授業のねらい

本授業は、多文化の中で協働する（協力して働く）スキルを磨くことを目的としている。日本語

教員資格の取得を目指す日本人学生と交換留学生（N2 レベル）が二人一組になり、日本語初級レベルの外国人児童（もしくは ICH の留学生）に対し日本語支援を行う。演習の授業内では支援の記録をもとに改善点などを話し合う。

期待される効果

①日本人学生

- ・異なる文化的背景を持つ人（交換留学生）と協力するスキルが身につく。
- ・外国人の定住化が指摘されている中、将来一緒にこの地域を支えていくかもしれない外国人児童と共生するイメージを持つことができる<sup>2)</sup>。
- ・日本語教員資格の取得を目指す学生に対し、実習後の経験の場ができる。

②交換留学生

- ・日本人と協力し課題に取り組むスキルが身につく。
- ・日本語指導の経験値が上がり、日本で販売されている教材に関する知識が得られる。留学生は日本国内の外国人コミュニティとの接点があるため、子供の教育に不安を抱く保護者と情報を共有することができる。結果的に留学生が日本人社会と外国人社会の結節点となる。帰国後に母国で日本語指導をする際にこの経験を生かせる。
- ・児童を支援することで、日本語を勉強するモチベーションが維持できる。

③外国人児童

- ・留学生が母語（例えばベトナム人児童に対してベトナム人留学生）で教えるため、母語の維持や疎外感の緩和につながる<sup>3)</sup>。
- ・留学生と接することにより、日本語の非母語話者でも学習すれば日本語が話せるようになり、やがては大学生にもなれる、というモデルが提示できる。
- ・放課後に日本語支援をすることで、言葉を間違えても許される（同級生に責められることがない）機会が得られる。
- ・家庭以外の場所で自身のアイデンティティを受け入れてくれる場所ができる。

④教育現場

- ・小学校教諭だけで、外国人児童が抱える問題に対応しなくてもいい、地域に一部委ねる、という選択肢が得られる。
- ・留学生と日本人学生のやり取りを見て、教職課程科目の中で学ぶ機会がほとんどなかった外国人に対する接し方を習得でき、教育現場で活かせる<sup>4)</sup>。
- ・外国人の非集住地域において、小学校が日本人社会と外国人社会の結節点となる。
- ・大学教員とつながることにより、他地域の外国人児童に対する支援について知る機会が得られ、学外との接点生まれる。

小学校内での日本語支援実施までの道のり

2019年4-5月 2021年カリキュラムに向け、文化交流学科ワーキンググループ発足。「多文化協働」という学科の新しい方向性を模索。

6-7月 日本語支援について日立市教育委員会・茨城県教育委員会に相談、既存の行政の枠組みでは難しいとわかる。

9月下旬 さくら日本語教室・今村温氏に連絡。

10月下旬 さくら日本語教室訪問（日本人学生・ベトナム人留学生とともに）。

11月下旬 今村氏から市教委指導課および支援先の小学校を紹介していただく。日立市内の小学校を訪問。

12月-2月「教育ボランティア」というかたちで、日本語教員資格取得を目指す日本人学生とベトナム人留学生をペアで支援に行かせ始める。

2020年2月下旬 3月より放課後の日本語支援の実施に目途が立つ。

3月 コロナ禍により中断。

2020年6月 小学校での授業再開を受け訪問。今後の支援について打ち合わせ。

7月 本学が全授業をオンラインで実施していることを受け、放課後の教室をお借りし、外国人児童に対してオンラインで日本語支援を開始（Teamsを活用）。

9月下旬以降 後期授業から対面授業に移行することを受け、小学校内でも対面で支援を実施（2021年1月現在も継続中）。

12月下旬 筑波大学 日本語・日本文化学類の先生方（澤田浩子先生、入山美保先生）とZoom会議にて情報交換。筑波大学が県南地域で実施しているオンラインでの日本語支援、つくば市教委の日本語ボランティア派遣の枠組みや日本語コーディネーターの役割についてご説明いただく。

#### 授業の実施状況

今年度の前期はコロナの影響により留学生が入国できず、日本人学生のみで支援を実施した。後期が開始される9月下旬より、ベトナム人留学生とグループを組んで日立市内の小学校にて日本語支援を実施している。外国人児童は、母語を完全に習得しているわけではなく、日本語ネイティブでもない。そのため、演習の授業内では外国語として日本語を習得した留学生と、母語として日本語を習得した日本人学生の間で、教え方について意見が分かれることもある。積極的に意見交換し歩み寄ることで、両者の間に位置づけられるであろう外国人児童に少しでも近づいていければと考える。

テキスト：『こどものほんご』（西原鈴子監修、スリーエーネットワーク、2002年）をベースに児童の日本語力に合わせて、各種カードや自作の教具を組み合わせる。

時間帯：週 1 回、放課後の約 45 分間（6 時限目）

履修している学生：日本人学生 5 名とベトナム人留学生 1 名（2 グループに分かれ担当は隔週）

#### 今後の課題

外国人児童の日本語支援は全国的に手探り状態で続けられている。課題は山積しているが、この授業を通して取り組みたい課題は以下のとおりである。

- ・使用するテキストについては、今後他大学との連携の中で検討する。
- ・コロナ禍において一時的に採用したオンライン授業を、支援者の派遣が難しい遠隔地の小学校に対して実施する。
- ・筑波大学、県教委、市教委と情報交換しながら、茨城県の状況<sup>5)</sup>にマッチした「茨城モデル」の日本語支援を模索する。

#### 謝辞

支援先を紹介して下さったさくら日本語教室の今村温氏に感謝申し上げます。加えて、コロナ禍において交換留学生と日本人学生を快く受け入れて下さった日立市内の小学校の先生方にお礼申し上げます。

#### 注

1) 茨城県 2015-2019 「データ集・市町村別在留外国人数」（最終アクセス 2020 年 12 月 28 日、<https://www.pref.ibaraki.jp/bugai/kokusai/tabunka/jpn/data/index.html>）

2) 外国人の定住化については、すでに 1990 年代から日系ブラジル人などのニューカマーの定住化が指摘されている（駒井洋編 1995 年『講座 外国人定住問題 第 2 巻 定住化する外国人』明石書店）。近年では、「永住を意図して移り住んだ人」という意味の「移民」という言葉で語られる。移民的バックグラウンドを持つ人の割合は増加し、日本は「移民の時代」に突入した、とみなすマクロ的な視点に立った研究が見受けられる（是川夕 2018 「日本における国際人口移動転換とその中期的展望—日本特殊論を超えて—」『移民政策研究』10 13-28）。

3) 現在は、外国人児童と交換留学生の母語は一致していない。今後は、市教委との連携の中で可能な限り実現させていきたい。

4) 現在のところ外国人児童に対する支援は、いわゆる「特別支援」の枠内に規定されている。文部科学省「教職課程コアカリキュラムの在り方に関する検討会」では、「特別の支援を必要とする幼児、児童及び生徒に対する理解」の「(3) 障害はないが特別の教育的ニーズのある幼児、児童及び生徒の把握や支援」の到達目標に「母国語や貧困の問題等により、」とある。本学では教職課程科目「特別支援教育」の中に盛



り込まれている。一般的に「発達障害」や「軽度の知的障害」の児童に対する支援を中心に学ぶため、外国人児童についての事柄に特化して学ぶことは少ない。(最終アクセス日 2020年12月28日、[https://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/shingi/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2017/11/27/1398442\\_1\\_3.pdf](https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2017/11/27/1398442_1_3.pdf))

5) 茨城県の県北地域には製造業に従事する外国人労働者が多く居住し、県西地域には農業に従事する外国人労働者が多く居住する。また、大洗はインドネシアの特定の地域からの移住者が多く、チェーンマイグレーションが見受けられる。このような外国人労働者を必要とする茨城の産業構造と日本語支援の在り方は深く関係すると筆者は考える。加えて、茨城は公共交通機関が少なく交通費と移動時間の制約があるため支援者の派遣が難しい。茨城を取り巻くさまざまな状況を考慮した支援の在り方が求められている。

# フォトギャラリー

外国人児童に対する日本語教育支援、さまざまな場面の画像をご紹介します。



**放課後ボランティア**  
グローバルとローカルをつなぐ小さな架け橋

日立市内の小学校には、通常学級で学ぶ外国籍の子供がいます。毎日過ごす中で基礎的な日本語を学ぶ場がないため、週に一度、0科の学生が日本語の授業を行っています（主催：国「特待講義A」担当：宮崎昌子）。10月30日の授業内容は「おかいものしかた」で、「借」と「本」の教え方、お金の教え方などを、コミュニケーションをとりながら実践形式で学んでいました。現状、日本語のサポートが必要な子供を支援する仕組みは遅れ気味です。日立市内の小学校では、市から基一回日本語のボランティアがくることと、上記の授業をメインのサポートとして補っています。

これからの義務教育の現場には、子供の情緒面・知的面をサポートする専門の先生だけでなく、外国語としての日本語を教えられる人材が必要になってくるのだろうと感じました。

【編集：沼崎・渡邊】

(3) ロンゴロンゴ 茨城キリスト教大学文学部文化交際学科アクティブ・ラーニングレポート 第57号 2021年1月

文化交流学科広報誌に掲載された記事

文化交流学科広報誌『RONGORONGO』第57号（2021年1月発行）より転載。記事は編集部の学生が取材した10月30日の授業の様態を伝えている。



文化交流学科広報誌の掲載記事（つづき）

## 小学校での授業風景







授業の準備作業 文化交流学科共同研究室にて





学生手作りの教材

# 参加学生

Online

# トーク

学生たちにとってこの授業はどんな経験だったのでしょうか。参加した6名の学生たち&担当教員・宮崎晶子先生によるオンライントークです。未来の後輩たちに向けたメッセージもお願いしました（2021年1月19日オンラインにて実施した座談会の収録です）

< オンライントーク参加者 >

徳光 朗（3年、司会）

齋藤 壮良（3年）

関 香杜沙（3年）

高橋 雅斗（3年）

中村 ひかり（3年）

DANG THI THUY VY（留学生、ベトナム）

宮崎 晶子（担当教員）

## ◇率直なところ、どうだった？◇

徳光：まず齋藤さん、率直な感想から聞かせてほしいんですけど、どうでした？

齋藤：なんだろうね、まあ、大変だけど、やっぱり日本語わからないで（授業が）進んでるわけだから、（子供が）どんどんわかるようになっていく姿をみるのは嬉しいなって。

徳光：（教える側の）モチベーションになる、みたいなね。中村さんはどうですか？

中村：そうですね、小学生がだんだん日本語しゃべってくれるようになるのは嬉しいし、めちゃめちゃ可愛いです（笑）いままで「みんなにち」（『みんなの日本語』）という教材だったけど、『こどものほんご』で教えることになってちょっと不安はありましたけど。

徳光：ああ、たしかに実習の授業で使うのは「みんなにち」の方だもんね。関さんは、子供の相手、ちっちゃい子の相手というのはすぐ慣れました？子供は恥ずかしがったりとかしてなかったですか？

関：最初は恥ずかしがっていたけど、だんだん慣れてきて今では子供がふざけているのを止めるのが大変なくらいです。

徳光：高橋さんは、ちっちゃい子と仲良くなるの得意そうに見えないんだけど（笑）、どうでした？

高橋：だめでした（笑）でも回数重ねて慣れてきて、今ではとても仲良くなった気がします。

徳光：その気持ちが一方通行ではないことを願います（笑）俺もね、最初はね、照れちゃってね。（子供が）話聞いてくれないどころかずっとマスクいじってるみたいな。

宮崎：そうだねえ、もじもじしてたねえ。

徳光：最初の方はなかなか大変だったと思いますけどもね。ヴィさん、子供とは仲良くなれま



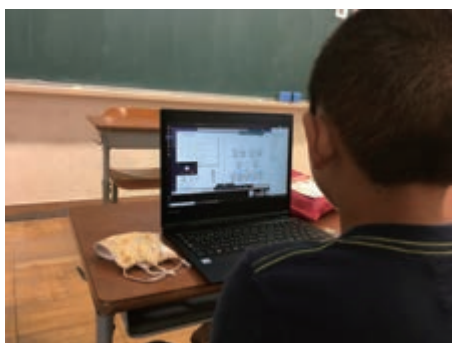
した？

ヴィ：はい、授業終わったあとさようならの挨拶するとき何回もバイバイって言うんだけど、目をみているとうちの弟みたいで、さよならしたくないって気持ちになりました。

徳光：そうそう、担任の先生と帰るとき何度も僕らの方を振り返ったりしてたよね。

#### ◇教材の工夫◇

齋藤：オンラインは小学生だとパワーポイントに慣れてないし、表情も見づらかったけど、対面だと会話のしやすさもあるし対面用の紙の教材を目の前に出して実物で授業すると理解が深まっている感じがしました。



関：私も対面の方がやりやすいなと感じただけ。でもコロナ禍で文化交流学科なのに海外に出て交流できない状況で…そんな状況でもオンラインによって交流ができたことが本当によかったと思っています。

宮崎・徳光：優等生みたいな答えね？

関：優等生ですから（笑）

宮崎・徳光：ああ、そうだった、優等生だった（笑）

徳光：関さんが用意する教材って、対面向きだなあって俺は思ってたんですけど、工夫していたことってありますか？

関：対面のほうが教材作りやすかったんですけど、オンラインの場合でもパワポのスライドでアニメーション機能とかを使うと楽しんでもらえる感じだし。新しい発見になりました。

徳光：高橋さんは工夫はありましたか？

高橋：パワーポイントだけだと子供が見てるだけみたいになって、授業に参加している感じがしないのか飽きちゃっている感じだったんです。今では紙にイラストを描いたりして子供が自分で取り組んでいる実感が出るよう工夫しています。

徳光：カルタみたいなね、動きのある教材がありましたね。

宮崎：そうだね、主体的に取り組めるような教具を用意していくという感じかな。

徳光：俺もコンセプトに「眠くならない授業」っていうのがあったんで（笑）

宮崎：あくび連発されたからね（笑）

徳光：パワーポイントのときは（子供は）あくび連発だったから。そこは工夫していきました。ヴィさん自身はこの授業楽しかった？

ヴィ：ほんとに楽しかった。以前ベトナムで生徒を教えた経験もあった、でも日本に来て、相手は子供だから日本語を教えるのはあんまり難しくはないかなと思ってたけど、やっぱり難し

かった（笑）子供は写真とかイラストとか見せると面白くて習いやすいかなと思ってたくさん作りました。その作った教材をいま見ると懐かしい感じです。

徳光：俺らもね、やったことないことだったからね、いろいろ勉強しながらだったね。ほんとに。

宮崎：うん。まあこの大学としてもやったことないことだし（笑）

徳光：ですよ。



徳光：中村さん、留学生のヴィさんと組んでどうでした？留学生と一緒に授業を教えるという経験はあんまりないですよ。

中村：留学生のヴィさんが生徒側の目線で、習う側の目線、違う目線でいろいろ気づいてくれて。

徳光：そうだよね。日本語最初から話せる日本の学生と、日本語を留学のために習って話せるようになった留学生とでは、全然見る場所が違うよね。そう思った。

#### ◇後輩に向けて◇

徳光：じゃあ最後にみなさんから聞きます。この授業を今後後輩たちが続けていくと思いますが、未来の、後輩たちに向けて一言ずつお願いします。

齋藤：はい、やっぱり文化交流学科って、（学生が在学中に）なにか特別なことをしなくても卒業はできてしまう感じもあるんですけど、やっぱり文化交流学科という名前通り一度でも異文化のひとたちと交流することって大事だと思うし、今なかなか外国に行けない状況でたとえばこの授業のような形で異文化にふれることができれば自分のなかできっと新しい気づきがあると思います。

関：私は日本語教育とか大学入る前には知らなかったし、最初はどうするかもわからなかったけど、とりあえずやってみるという精神でやってみたら楽しいなって思いました。だからぜひ後輩のみなさんで迷っているひとがいたなら、まず「やってみる」という精神でやってみてほしいです。

高橋：（日本語教育の）授業とかで教案を作って、日本人同士で教え合うといった予行演習をやると思うんですけど、こういう実際に外国人の児童に教えるという授業をやると予行演習ではわからないような気づきがたくさんあります。ぜひ受講してほしいなと思います。

中村：日本語教育実習だったら日本語学校に行って日本語を教えると思うんですけど、この授業は小学校に行き、日本語のしゃべれない小学生に教えるにいくという、他では経験できない授業ですので、みなさんぜひ受講してください。

宮崎：ヴィさんにはこれから来る留学生に向けて一言お願いできますか？

ヴィ：はい。自分が日本語を習うだけでなく、日本語を教えるということをする、日本語の能力もより向上するように思います。これから来る留学生のみなさんには、せっかく日本に来るのですから、ぜひこの授業を体験してほしいと思っています。

徳光：ええと最後に、みんながいい話してくれたんで、あと付け加えることはないんですけど、俺は「C科（文化交流学科の通称）で何してんの？」って親戚から質問攻めにあった時に、「外国人の子供に日本語教えに行っています」って言って今年は乗り切りました（笑）（こういう活動に自主的に取り組まないでいると）C科ってほんと話すことなくなるんでね。もし親戚からね、大学で、C科で何やってんの？って聞かれたとき、この授業のこと言えば、「へえ、すごいね！」って言われるような、そういう授業だと思うんで（笑）

宮崎：そうだね、みんなが就職活動のときにもね、学生時代に取り組んだこととして胸を張って言っていると思うよ。

（オンライントークおわり）

## II 「編集技法」

情報発信の技術を実践的に学ぶ



## 情報発信とアクティブ・ラーニング

鈴木 晋介

演習「編集技法」では主として Adobe の編集ソフト InDesign の操作方法を学びながら、チラシやポスターのデザイン、記事のレイアウトや編集に実際に取り組んでみるというアクティブ・ラーニングを行っている。InDesign は出版関係者が使用している本格的ソフトであり、機能を十全に使いこなすには相当な修練が必要である。とはいえ、わたしたちが普段使用している Microsoft Word や Excel などと同様、まずは基本的な機能からはじめて少しずつ操作を学んでいくだけで十分に本格的な（「本物の雑誌やポスターっぽい！」）作品を作り上げることができる。

今年度の授業は後期の月曜 5 限、11 号館のコンピューター教室（11302）で行った（この教室に InDesign が 20 台分インストールされている）。授業の流れは、まず教員が InDesign の特定の操作方法の実演をスクリーンに投射し、受講者も手元のデスクトップパソコンで同じことをやってみる。全員が当該操作を理解するまで教員は個々の受講者を回ってマンツーマンの指導を行う。この指導には担当者の染谷智幸と鈴木晋介の二人があたるが、技術指導補助としてスチューデント・アシスタント（SA）が 1 名ついている（スチューデント・アシスタントは編集技法を既に履修し単位取得した者から公募で選出される。本年度は 4 年生の小岩美帆さんが担当した）。

受講者があらかた慣れてきたところで、当該操作の応用編としての課題を提示する。受講者はその課題に 1 週間かけて取り組み、翌週の授業時に作品の講評会を行うことになる。講評会では、まず作者が作品を投影しながらプレゼンテーションを行う。工夫したところ、うまくいったところはもちろんのこと、「本当はこんな風にしたかったんだけど、やり方がわからなかった」といった点も挙げてもらう。学生がわからなかった技術はその場で教授する（こうしたやり方は学生側の欲求にその場で応えることもあって技術の吸収が非常に早くなる）。作者のプレゼンテーションのあとは受講者全員からのコメントである。お互いの作品にコメントしていく中で、上手な作品作りのためのツボのようなものが徐々に身についていく。

2020 年度に受講者が取り組んだ課題は次の通りである。

< 2020 年度「編集技法」の課題 >

- ①自己紹介と授業に取り組む決意を InDesign で記事にしてみよう
- ②自分の名刺をつくってみよう

- ③文化交流学科『アクティブ・ラーニング報告書』の表紙を作成してみよう
- ④好きなテーマで雑誌の記事を書こう
- ⑤文化交流学科広報誌『RONGORONGO』の表紙と1ページ分の記事を作成しよう

課題③は、言うまでもなく本報告書のことである。いまあなたが手にしているこの冊子の表紙もじつは本年度「編集技法」の受講者が手掛けた作品。課題提示時に優秀作品は報告書の表紙として採用する旨を伝え、提出された全員の作品のなかから教員が選出するというやり方である。本授業の「アクティブ・ラーニングたる所以」はこの辺りにある。すなわち授業で身につけた技術やそれを活かして取り組んだ課題作品が、そのまま学生自身の所属する学科の情報発信と連結していくのである。

同様のリンクはもうひとつ、課題⑤にみる『RONGORONGO』との間にもある。『RONGORONGO』とは長年にわたり発行されてきた文化交流学科の広報誌で、学生たちがその発行の主体となってきた。いまでは編集技法で技術を身につけた学生の一部がそのまま同誌の編集部員となって学科の情報発信に実践的に取り組むというルートが形作られるようになった。

本授業は後期15回という短い期間ではあるが、近年の学生たちの情報技術習得の高さには目を見張るものがある。自身の成果を目に見える形で楽しみながらのアクティブ・ラーニング。高校生向けの学科広報チラシの作成や講演会のポスターなど、身近なところでも編集技法で取り上げるべき新たな課題はまだまだある。学科の情報発信の場の広がり、このアクティブ・ラーニングのフロンティアと重なっているのである。

## 学生作品集



「編集技法」の授業中に出された課題に対して学生たちが取り組んだ作品を紹介したい。本年度の受講者のうち2名はAdobeソフト「イラストレーター」を使用した経験があったが、この2名を含めて全員がInDesignの操作は初めてであった。ここで紹介する課題は上述の③、「文化交流学科の『アクティブ・ラーニング報告書』の表紙を作成してみよう」というものである。この課題に学生たちが取り組んだのは第7回～8回目であるから、ちょうど演習の半分あたりである。もちろん学生ひとりひとりの感性の違いだけでなく、パソコン一般の操作の慣れ具合の差もあるので完成度にばらつきが出るのは当然としても、演習担当者の方からみればわずか数回の演習で学生たちが複雑な操作を習得するのを目の当たりにするのはある意味で驚きであった。この演習をきっかけに編集やデザインに興味を持ち、今後も独学で技術を磨いていく学生が多く出ることを期待している。



佐藤 凛 (2年)



長山星矢(1年)



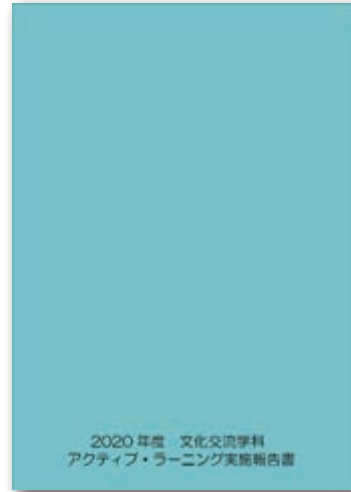
田所華穂里 (2年)







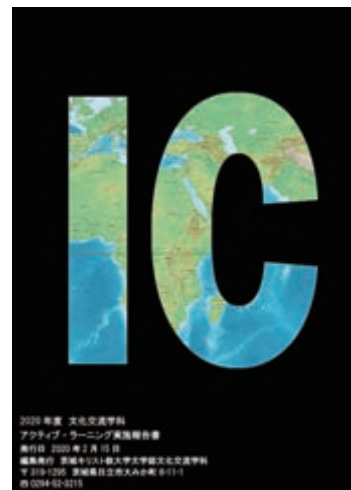
金澤優花 (2年)



大串華世① (2年)



大串華世② (2年)



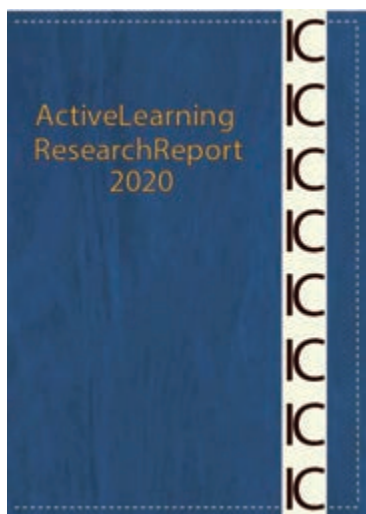




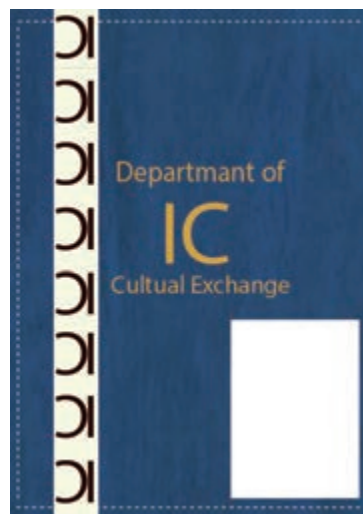
鶴川永吉 (1年)



埴真希 (2年)

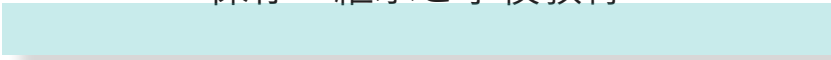


清水美楠 (3年)



## <シンポジウム>

ユネスコ無形文化遺産「山・鉾・屋台行事」の  
保存・継承と学校教育





神峰神社大祭礼「日立風流物」  
前館が展開して操り人形が芝居を演じているところ  
撮影：中井川俊洋氏（2019年5月5日）

## シンポジウム開催報告 清水 博之

本学では、2020年12月22日（火）にオンラインシンポジウムを開催しました。参加者は、全国各地の研究者や山・鉾・屋台行事の保存会関係者、文化財保護行政の関係者、そして本学の教職員や学生の55名の方たちでした。

基調講演では、佛教大学歴史学部教授の八木透先生から、大学生が授業で学んだことを京都祇園祭において実践的に体験することで無形文化遺産の保存・伝承の一端を担っていることや、卒業後も青年部として継続してかかわる仕組みができていくことについて、お話を伺うことができました。

パネルディスカッションでは、秩父市教育委員会の伊藤暁さんから、祭りの日に小中学校を休業するなど、市全体で無形文化遺産の保存・継承を支援している事例を紹介していただきました。日立風流物を継承する日立郷土芸能保存会の水庭久勝会長や4名の支部長からは、2019年5月の大祭礼で初めて外部からの支援として本学学生が参加したことによって、保存・継承により良い効果があったという報告がありました。本学教員の岩間信之先生からは、本学におけるこれまでの地域貢献の取り組みや今後の展望についての報告がありました。これらの発表から、各地で学校教育が無形文化遺産の保護・継承に資する活動を展開していることが明らかになりました。

そして、会場に集まった本学学生からの質問とパネリストからの応答など、熱心なディスカッションが交わされました。地域との連携をめざす本学にとっても、これからの教育や活動にとっても役立つ内容でした。なお、このシンポジウムの記録は、年度内に報告書として本学ホームページ上で公開する予定です。



綾傘鉾の囃子方：風流囃子物の象徴

### 【シンポジウム概要】

名称：ユネスコ無形文化遺産「山・鉾・屋台行事」の保存・継承と学校教育

主催：茨城キリスト教大学文学部文化交流学科 地域・国際交流センター

後援：全国山・鉾・屋台保存連合会

日時：2020年12月22日（火）13時30分～15時50分

会場：Zoomを用いたオンラインシンポジウム

#### 基調講演

「祇園祭と大学生—綾傘鉾を事例として—」

八木 透氏（佛教大学歴史学部歴史文化学科教授）

#### パネルディスカッション

伊藤 暁氏（秩父市教育委員会文化財保護課主幹 全国山・鉾・屋台保存連合会事務局担当）

水庭 久勝氏（日立郷土芸能保存会会長）

岩間 信之氏（茨城キリスト教大学地域・国際交流センター長）

#### コーディネーター

清水 博之（茨城キリスト教大学文学部文化交流学科）



秩父 本町の屋台



京都 綾傘鉾巡行

\*編集者注：本報告は茨城キリスト教大学ホームページ掲載用に執筆された文章を転載したものです。本学の地域・国際交流センターのページもどうぞご覧ください (<https://www.icc.ac.jp/local/index.html>)

< 講演会 >

香港の若者はなぜ政治化したのか



## 2020 年度文化交流学科講演会報告

志賀 市子

2020 年度文化交流学科講演会「香港の若者はなぜ政治化したのか」

講師 富柏村 氏

2020 年 11 月 25 日 6 限 17:40～19:10 11203 教室

香港在住 30 年のフリー・ジャーナリスト富柏村氏に、今なお混乱の続く香港情勢について若者の政治意識に焦点をあてて話していただいた。富柏村氏は、朝日新聞の言論サイト『論座』に、香港の民主化問題や中国の現状についての記事を多数執筆している。講演では、2014 年～15 年の雨傘運動から、昨年の逃亡犯条例反対の抗議デモの実態、そして今年 7 月の国家安全維持法の施行に至る経緯について、実際に氏が抗議デモの現場で撮った写真を見ながら、取材に基づく生々しい話を聞くことができた。また学生と同じ世代である民主活動家の黄之鋒氏や周庭氏の逮捕にも話は及び、香港は今後どうなっていくのかという展望で締めくくられた。最後の質疑応答では、学生や教員から、習近平体制と香港情勢との関連や、中国本土の若者は香港の動きをどのように見ているのかといった質問が出た。参加者の感想はおおむね「興味深かった」、「香港情勢がよく理解できた」というものだった。以下、「中国の歴史と文化 B」履修学生の感想文からいくつか抜粋する。

### 【学生の感想文】

①今回の富柏村さんの講演を聞いて、普段ニュースなどで断片的にしか知ることのなかった香港のデモについて深く知り、自分なりに調べるきっかけになったと感じました。まず、私の中のデモの印象としては、とても危ないものでデモを行う時には事前にその周辺の人には情報が流れていて家から出なかったり、デモが行われる周辺には足を運ばなかったりというような措置をとるくらい危ないものだという認識がありました。しかし、今回の講演会で見たお写真では、まるで今から大学にでも行くのかと思ってしまうような軽装であったり、お話の中でデモを横目に犬のお散歩をしていたり、赤ちゃんをベビーカーに乗せて歩いている人がいたりと警察もデモを禁止するのではなく周りに危害を加えず安全に行うように見守っているというような平和なデモであることを知り考え方が変わりました。また、周庭さんのことについても朝の情報番組で少し取り上げられているのを学校の準備をしながら見ていたぐらいで私と同じぐらいの若い女性が逮捕されたという認識しかありませんでした。しかし今回の講演を通して彼女がどのような活動を行い逮捕されてしまったのか知ると共に興味を持ち彼女の YouTube や彼女についての報道を視聴しま

した。17歳の頃から学生デモに参加し香港が民主化になるように、自由が確立するように、しっかりとした考えを持って様々な活動を行っていることを知る事ができました。日本人の若者は自分の意思表示ができる選挙権があるのにもかかわらず政治に興味を持たず選挙に行かないのがもったいないという言葉がとても印象的で、私自身も日本の政治に対して興味を持って考えるべきだと考えさせられました。

②私は講演会で富柏村さんの話を聞いて、香港と中国の関係に緊張が高まっている事を改めて感じました。印象に残った事は、「今年の香港のデモの際に中国の若者が支持をしなかった事」についてです。中国の若者は、共産主義である事に対して肯定的であるのか否定的であるのかが気になっており、今年の香港のデモで中国人の若者が支持しなかった事を通して「中国の若者は共産主義であることに対して肯定的なのだな。むしろ、誇りを持っているのだろうか。」と感じていました。しかし、富柏村さんの「中国の若者は『こっちは中国の共産主義で頑張っているのだから、香港人も少しは我慢しなよ。』と思っている。」という話を聞いて、やはり中国人も共産主義について完全に肯定的では無いのだなと感じました。また、中国にはインターネット規制があるにもかかわらず、世界の情報は多く漏れて入ってきているという事実も印象に残りました。それでも、中国人は民主化のデモを起こさないで、習近平体制は国内をかなり厳しく弾圧しているのだろうなと思いました。

③とても面白く、興味深い時間だった！お話を聞いてよかった、と強く感じた。

●本土の人間から見た「香港人」に対する感情について

なんとなく、「香港はあんなに頑張っているのに、本土の人はひどい」みたいなイメージがあった。けど、今日の話聞いて、「ひどい」と言い切ってしまうのはなんだか早計な気がした。「なんかかんた言って、中国国内では色々な情報が回っている」という話には（人類の歴史だのを考えてみれば、そりゃそうか…）と思ったし、自分はどうも「中国は怖い国だ」という先入観に囚われて、視界が曇っているような気がする。気をつけたいと思った。

●特異的な民主化運動

「本来であれば、運動が過激化すると支持者が離れていく。だけど香港のそれではそうした動きがなかった。」と話されているのに対して、ホントだ！確かに！となった。意識しないとピンとこないけど、自分だって教科書にのるような歴史の延長線上にいるんだな…と感慨深いような気持ちが湧いた。

\* 講演会参加者

「中国の歴史と文化 B」履修学生 8名（2、3年生）

基礎演習Ⅰ履修学生（1年生）

文化交流学科教員 6名、他学科教員 1名





# 香港の若者は なぜ政治化したのか？

講師：富柏村氏

香港在住30年のフリー・ジャーナリスト。香港中文大学修士課程中退。  
朝日新聞の言論サイト『論壇』に、香港の民主化問題や中国の現状に  
ついての記事を多数執筆している。

2020年

**11月25日** 水 17:40-19:10

11号館 11203教室

問い合わせ先

茨城キリスト教大学 文学部文化交流学科

担当 志賀 市子 MAIL : shiga@icc.ac.jp

新型コロナウイルス感染症対策のため、他学部・他学移の方で  
受講を希望される場合は前もってお問合せください。

2020 年度文化交流学科講演会ポスター

# < Faculty Development >

FD 研修会

韓瑞大学とのオンラインセッション



## 文化交流学科 FD 報告

文化交流学科主任 染谷 智幸

今年度は、コロナ禍の中、前期は全てオンライン等の遠隔授業、後期も最後の1、2週間は遠隔授業になりました。学生のみなさんも大変だったと思いますが、教員側も慣れない授業準備と運営で右往左往いたしました。いま振り返っても冷や汗ものでしたが、火事場の××力と言いますか、何とか乗り切ることが出来ました。

とはいえ、課題もたくさん見つかりました。それを少しでも解消し、今後の授業につなげてゆこうということで、後期が始まってまもなく先生方を中心に学科FDが以下の要領で行われました。(先生も勉強しているんですね!)

日時：2020年10月23日(金) 休校日 午前10時より12時まで

内容：講演「韓国の大学におけるオンライン・ICTの対応と、韓瑞大学校の現状と課題」  
～約1時間の講演の後、30分程度の質疑応答

講師：金泰燾 (Kim Tae-do)

韓瑞大学航空融合学部グローバル言語協力学科教授 兼国際交流支援処部長

講師：李尙勳 (Lee Sang-hoon)

韓瑞大学教育革新院 (Institute for Innovative Education) 准教授

韓国はよく知られているように、日本より進んだICT大国です。大学も日本の大学より進んでいて、様々なICT教育や研究が行われています。そこで、本学の交流協定校である韓瑞大学校の日本学科の教授である金泰燾先生にお願いして、韓瑞大でオンライン教育の中樞を担っておられる李サンフン教授に韓瑞大のオンライン状況と課題を語っていただき、金泰燾先生に通訳をお願いいたしました。私なりの観点からまとめると以下の5つになると思います。

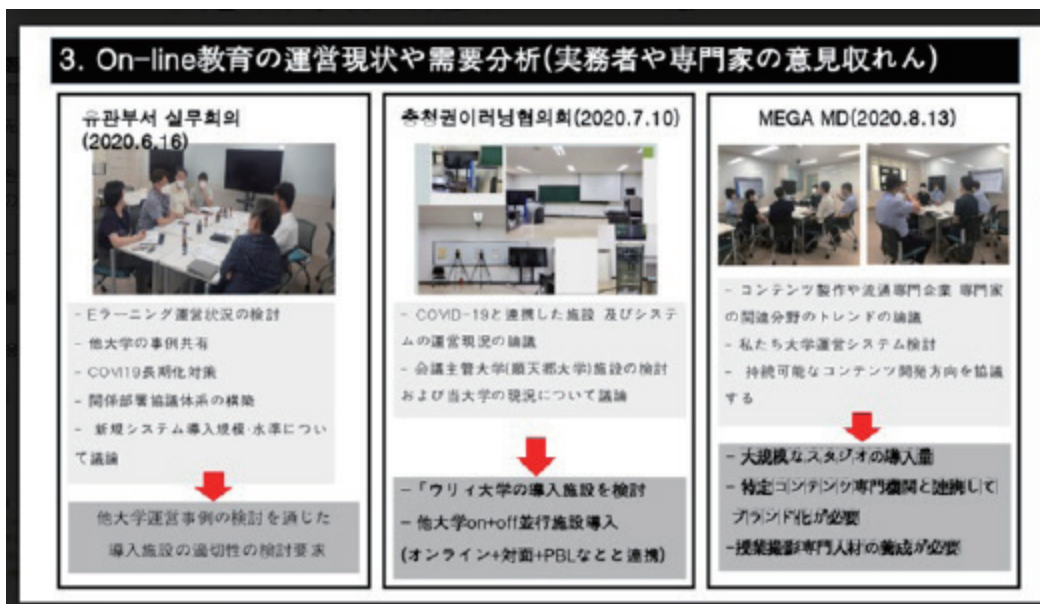
- ①韓瑞大が良い例のように、韓国の大学のICTは日本よりもかなり進んでいて、日本側(本学側)が学ぶ点が多い。
- ②韓瑞大は自らの大学に合わせた形でオンラインソフト等を改良していること(授業ではZOOMと組み合わせて多様な展開をしていた)
- ③学生の出欠管理などが自動化されていて、教員にとっては使い勝手が良さそうであった。

④教室と自宅からの両方からオンラインで繋ぐハイブリッド方式については模索中であつた。

⑤学生がどう自主的にオンラインを活用し勉強・研究を続けてゆけるかに、オンライン教育の中心的主題と課題を見出していた。

特に④ですが、染谷は、実際に2020年度後期はハイブリッドで授業を行いました、これがなかなか難しく、韓瑞大の状況を、この時もう少し詳しく聞いておけばよかったですと後で感じました。とくに、授業の一体感をどう作り出すか、李教授のお話でもその点が問題だとおっしゃっていました。こうした問題点を日韓共同で開発できたら素敵だと思います。

このオンライン授業は、今年のみで終わるものではありません。今後も重要な授業ツールとして活用されてゆくものですから、今後とも研鑽を重ねて、韓瑞大の諸先生と連絡を取り合いたいと考えています。



FD 当日に使われた、李教授のパワーポイントから



文化交流学科の学生と染谷+金泰燾先生（2005年ごろ）



李尙勳先生（近影）



染谷の帽子をかぶってご機嫌の金泰燾先生（近影）

『アクティブ・ラーニング報告書』は、茨城キリスト教大学文学部文化交流学科の出版物です。  
*Active Learning Report* is published by Department of Cross- Cultural Studies, College of Literature,  
Ibaraki Christian University.

2020 年度 文化交流学科

## アクティブ・ラーニング報告書

2021 年 2 月 15 日発行

©2021, Department of Cross-Cultural Studies, College of Literature, Ibaraki Christian University

発行 茨城キリスト教大学文学部文化交流学科  
〒319-1295 茨城県日立市大みか町 6-11-1  
電話 0294-52-3215 (代表)

編集 鈴木 晋介

編集協力 小岩 美帆 RONGORONGO 編集部

表紙デザイン 佐藤 凜

---



